

日本文化部会Ⅱ

【概要】

寺 内 由 佳*

第10回国際日本学コンソーシアム日本文化部会Ⅱは、文教育学部1号館1階大会議室にて15日午前で開催し、報告者は4人だった。以下、各報告内容や質疑応答について概略をまとめる。なお紙面の都合上、すべての内容を記載できなかったことをご了承いただきたい。

1. 高橋喜子さん（お茶の水女子大学院生）

「紅葉山文庫における外交関係文書の保管」

江戸城内に設置された紅葉山文庫には、幕府が収集した書籍だけでなく、幕府が作成した文書や記録類も保管されていたことをふまえ、外交関係、とくに朝鮮書翰を題材に、文書・記録類の保管状況や管理体制の実態を分析された。朝鮮書翰の風干や封印者の変化に注目し、文書全体における取扱の変化との連動、幕府による文書保管体制の整備や政治機構の改革、そして外交関係による影響の可能性を指摘された。また、条約関係文書は書翰と異なる効力を持つとされ、保管状況には幕府内での文書の位置づけがうかがえ、その背景には様々な要因があると述べられた。

会場からは、中国や朝鮮、また古代の国王間で交わされた書状の形式等との比較による質問がなされ、国際関係を視野に入れた検討が行われた。

2. ジェシー・ドライアンさん（南カリフォルニア大学院生）

「寺社縁起と霊地ネットワーク-厳島神のイメージ構造をめぐって-」

寺社縁起等の文面をもとに、厳島神に対するイメージの様相と、それがどのように利用されたのかを考察された。厳島神社における平家滅亡後のイメージ構造を追い、中世には厳島神のイメージが既存の言説からつくられたこと、また、蒙古襲来後に寺社が行った敵国降伏の祈祷や寺社縁起の集積活動と、朝廷や幕府への恩賞請求との関連性など、中央の寺社と地方の寺社との関係や中世日本の国土観についても考察された。

会場からは、日本における神々のあり方から、軍神のみをクローズアップすることへの疑問や、神功皇后伝説については、中央から地方へというよりも九州→瀬戸内→畿内へ広まったと考えられるのではないか、という意見も出た。

3. マルタン・ノゲラ・ラモスさん（パリ・ディドロ大学）

「潜伏キリシタン・カトリックのみる自宗教と異国（江戸後期・明治初期）」

カトリックは江戸後期-明治初期において、日本の慣習・信仰を乱す異国の宗教として捉えられていたが、カトリック信徒自身は、自らの信仰をどのようにみていたのか、という視点から、潜伏キリシタンとしてのカトリック信徒における信

*お茶の水女子大学大学院院生

仰意識の変化を考察された。潜伏キリシタンの系統とその多様性といった組織構造、宣教師再渡来以前に潜伏キリシタンが持った異国意識と信仰起源、信仰起源と宣教師にみる異国性、そして江戸幕府・明治政府による弾圧と信仰意識の変化、という内容で、具体的な史料を提示されながら詳細な分析によって論を展開された。

4. 金善民さん（淑明女子大学校教授）

「古代日本と濟州」

韓国の濟州・耽羅について、5－6世紀には国家として存在が確認されるにも関わらず、その実体が未だ明かにされていないことを受け、古代の史料をとりあげ、その建国神話や、耽羅使の来日にみられる日本との関係に視点を置いて分析された。

会場からの質疑を通して、日本や韓国との比較も含めた耽羅の「国家」としてのあり方や、王が使者として来日したという様相にみられる当時の体制について検討がなされた。そのなかで氏は、とくに百濟滅亡後の様相を重視され、この時代の耽羅については『日本書紀』の分析からある程度の把握が可能であると述べられた。

以上の報告によって、各々の研究テーマを発端とし、国際的かつ多様な視点から、歴史・文化を軸とした日本学について考える機会にめぐまれた部会となった。